

「帰ってきたヒトラー」 ★★★★★

2016（平成28）年6月18日鑑賞＜T O H Oシネマズ西宮OS＞

監督：デヴィッド・ヴェンド
原作：ティムール・ヴェルメシュ『帰ってきたヒトラー』（河出文庫刊）
アドルフ・ヒトラー／オリヴァー・マスッチ
ファビアン・ザヴァツキ（マイTVのディレクター）／ファビアン・ブッシュ
クリストフ・ゼンゼンブリック（マイTVの副局長）／クリストフ・マリア・ヘルプスト
カッチャ・ベリーニ（マイTVの新局長の女性）／カッチャ・リーマン
フランツィスカ・クレマイヤー（マイTVの受付）／フランツィスカ・ウルフ
キオスクのオーナー／ラース・ルドルフ

ミヒャエル・ヴィツィヒマン／ミヒャエル・ケスラー

マイTVのボス、ケルトナー／トーマス・ティーム

2015年・ドイツ映画・116分

配給／ギャガ

＜日本では『火花』、ドイツではこんな小説が大ヒット！＞

日本での近時の大ヒット小説は、お笑い芸人の又吉直樹が書き、2015年の第153回芥川賞を受賞した『火花』。これは「私小説」だが、2012年にドイツで大ヒットした小説はそうではなく、ティムール・ヴェルメシュのオリジナルな発想による『帰ってきたヒトラー』。これはタイトルどおり、1945年4月30日に妻（自殺前日に結婚）のエーファ・ブラウンと共に自殺した（はずの）アドルフ・ヒトラーが、2014年のドイツに蘇り、大騒動を巻き起こしていく姿を描いたもの。その原作を、一部にドキュメンタリー的手法を併用しながら映画化した本作は、原作どおり皮肉たっぷり、風刺たっぷりの映画だが、それだけではなく、意外に笑えない説得力に富んだ社会問題提起作になっている。

折りしも、2016年の今は、「ヨーロッパの優等生」と言われ、メルケル首相の指導力が際立っていたドイツも難民・移民問題で大いに苦しんでいる。また、イギリスではいよいよ6月23日にEU離脱の可否を問う国民投票が実施される等、ヨーロッパは大きな転換点にある。そんな時代状況下、もしホントにヒトラーがドイツに「降臨」し、1930年代と同じような手法で、ドイツ国民に真正面から語りかけてきたとしたら・・・。

＜タイムスリップものは多いが、ヒトラーのそれとは？＞

「タイムスリップもの」は『戦国自衛隊1549』（05年）（『シネマルーム7』80頁参照）、『魔界転生』（03年）（『シネマルーム3』310頁参照）等の「時代もの」から、『時をかける少女』（06年）（『シネマルーム12』398頁参照）、『地下鉄（メトロ）に乗って』（06年）（『シネマルーム12』45頁参照）、『サマータイムマシン・ブルース』（05年）（『シネマルーム8』150頁参照）等の「現代もの」までたくさんあり、いずれもそのアイデアの奇抜さ、面白さを競っている。しかし、いくら「戦後70年」を経たとはいえ、ヒトラーが現代に降臨するタイムスリップものとは、何ともはや！

ドイツでは、ヒトラーを礼讃する「ネオナチ」の勢力が一貫して一定程度根付いているが、ヒトラーはユダヤ人のホロコーストを行った極悪非道の男という評価が定着しており、少しでもその価値を認めたり、礼讃したりするのはドイツではご法度になっている。そのためか、本作のチラシには「世界中を沸かした【超問題アリ】ベストセラー」「恐れを知らぬ映画化！」「安心してください。大人には危険ですがお子様には楽しいコメディです」「笑うな危険」等々の、どちらとも解釈でき、どちらの陣営からも非難されないように用心した「宣伝文句」が並べられている。

本作（の原作）がドイツ国内で250万部を売り上げ、世界42言語で翻訳、権威あるタイムズのベストセラーリストでも堂々NO.1に輝いたのは、きっと2014年に蘇ったヒトラーが「モノマネ芸人」としてブレイクするという設定にしたこと。こうすれば、その片寄った主義主張がストレートに発信されたとしても、そこには笑いやブラックユーモアが含まれることになるのでテレビ放映もOK。日本で言えば、いわば「たけしの毒舌」と同じようなものとして許容される可能性が高くなるわけだ。なるほど、なるほど・・・。しかし、それにしてもヒトラーのタイムスリップものとは・・・。

＜壮絶なテレビ局内の権力闘争に注目＞

私は毎週日曜日にテレビで放映される、『そこまで言って委員会』の大ファンだが、これは東京では放映されていないらしい。本気でこれを東京で放映しようとするれば、何よりも某局内での権力闘争に勝利する必要があるはずだ。しかして、本作導入部では、①民放の「マイTV」でフリーランスで働いているものの、解雇を言い渡されてしまったファビアン・ザヴァツキ（ファビアン・ブッシュ）、②次に局長に抜擢されると思い込んでいた、副局長のクリストフ・ゼンゼンブリック（クリストフ・マリア・ヘルプスト）、③ゼンゼンブリックを出し抜いて局長に抜擢された、辣腕で辛辣な女性、カッチャ・ベリーニ（カッチャ・リーマン）の3人が、「ヒトラーのそっくりさん」の活用方法を巡って展開する権力闘争のさまが面白おかしく描かれる。2014年のドイツに蘇ったアドルフ・ヒトラー（オリヴァー・マスッチ）をモノマネ芸人として笑い飛ばすのもよし！それがバカ受けすれば、視聴率稼ぎのため更に活用するのもよし。本作導入部では、現代に降臨してきたヒトラーの活用方法をめぐって、「マイTV」での権力闘争の姿が描かれるから、それに注目！

キオスクのオーナー（ラース・ルドルフ）と話している「ヒトラーのそっくりさん」を発見し、最初にこれを発掘したのは、ザヴァツキ。ヒトラーと瓜二つの演説能力に魅せられたザヴァツキは、「ヒトラーのそっくりさんが現代のドイツを闊歩する」という番組を企画することによって、自己の立場の回復を目指すことに。それに乗ったのが、新局長に抜擢されたベリーニで、その狙いは大成功！「ヒトラーのそっくりさん」は至って真面目にマイクとカメラの前で「あるべきドイツ」や「あるべきドイツ国民」のことを語っている（叫んでいる）だけだが、なぜか、それがお笑い芸としてドイツ国民にバカ受け！そんな姿を見て、私は思わずゾ・・・。

＜お笑い芸人の人気なんて、「不祥事」で一気にガタ落ち！＞

ビートたけしは1980年～82年の漫才ブームが一気に冷めた後も、また島田紳助が暴力団幹部との「黒い交際」によって芸能界から追放された後も、今日までしぶとく生き残っている。それに対して、ヒトラーのそっくりさんは？人気俳優や人気TVタレントだって、不祥事を起こすと一気にマスコミに叩かれて人気ガタ落ちになってしまうのだから、それでなくても人気のうつろいやすいお笑い芸人などは、ちょっとした不祥事で一気に人気ガタ落ちになる例はザラだ。

面白いのは、その不祥事の暴露がホントに偶然の不祥事の発生のためなのか、それとも誰か敵対勢力や反対勢力が仕組んだ罠なのかかわからないところ。しかして、本作中盤にみるヒトラーのそっくりさんの人気のガタ落ちは、ベリーニ新局長に「マイTV」の実権を握られてしまった副局長ゼンゼンブリックの陰謀だ。「ヒトラーのそっくりさん」は根がかなり怖い人だったことは、ザヴァツキが「ヒトラーのそっくりさんが現代のドイツを闊歩する」という番組を撮っている時、情け容赦なく小犬を拳銃で射殺した姿を見れば明らかだが、その映像がゼンゼンブリック副局長の謀略によってテレビ映像に流されると、たちまち世間はブーイングの嵐となり、「ヒトラーのそっくりさん」はテレビ界から干されてしまうことに。

しかし、テレビがダメなら本があるさ。1923年11月の「ミュンヘン揆」で逮捕されたアドルフ・ヒトラーが獄中で『我が闘争』を書き、これを大ヒットさせたのと同じように、ヒトラーのそっくりさんは「現代のベルリンにヒトラーが目覚める」という内容の本を執筆すると、これが大ヒット！瞬間にベストセラーになったうえ、ザヴァツキが監督となって映画化までされることに。何ともはや・・・。

しかしてここでの大問題は、これはお笑い界やテレビ界の視聴率争い？それとも「ヒトラーのそっくりさん」こと「2014年のドイツに蘇ったホンモノのヒトラー」が本気で「あの時の夢をもう一度」と目論んでいるの？ということだ。本作を観ている観客はみんな後者であることがわかっているが、ザヴァツキ監督やベリーニ新局長をはじめテレビ局の関係者や肝心のドイツ国民たちは、あくまで前者だと考えていたからこりゃ大問題。さあ、本作後半からクライマックスに向けての更なる展開は・・・？

＜舛添知事を選んだ東京都民も猛省せよ！＞

本作でドイツ国民全員がお笑い芸人「ヒトラーのそっくりさん」と考えている男は、その語り方がヒトラーそっくりであるだけでなく、語っている内容もヒトラーそっくりだった。これは2016年の時点では、アメリカの共和党の大統領候補になったドナルド・トランプが語っている人種差別政策の内容とも共通している。そして、その是非はともかく、その内容は本音のものでわかりやすいものだ。また、ヒトラーとトランプに共通しているのは、両者とも何事も多数決で決める民主主義と選挙、投票を尊重し、そこでの権力闘争（票取り合戦、プロパガンダ）に徹しているということだ。

ヒトラーのプロパガンダに騙されたドイツ国民はバカだった。後になってそうケチをつけるのは簡単だが、それなら、去る6月21日に政治資金規正法違反疑惑で辞職した舛添東京都知事に対して、2014年2月の都知事選挙で圧倒的な票数を与えた東京都民も同じくバカだった。そう言わざるをえない。甘利明元経済再生担当大臣の都市再生機構（UR）と建設会社との間の補償交渉への介入行為が、あっせん利得処罰法違反に該当するか否かという問題に比べると、舛添都知事の政治資金規正法違反問題では「セコさ」が際立っており、とにかく誰にでも問題点がわかりやすかった。そのため、マスコミの攻撃材料として最適だったわけだ。テレビでこのネタを放映すればどんどん視聴率が上がっていったそうだから、連日それを見て（楽しんで）いた日本国民全体のレベルもたかが知れたものだ。舛添要一氏を東京都知事に選んだ東京都民は、本作を鑑賞しながら猛省することが不可欠だ。

＜ヒトラーを葬り去れ！これはホント？それとも？＞

映画では『恋に落ちたシェイクスピア』（98年）をはじめとして「劇中劇」の手法がよく使われる。1月10日に観た行定勲監督の『ピンクとグレー』（16年）は、何と前半2分の1が劇中劇だったことにすべての観客は驚いたはずだ（『シネマルーム37』242頁参照）。劇中劇の作品には名作が多いが、それが成功するか否かは、要するに観客を騙せるストーリー構成がとれているかどうかによることになる。

しかして、本作のクライマックスは、「ヒトラーのそっくりさん」を発掘し、それを金づるにして「マイTV」への復帰を果たしたばかりか、干されている間に彼が書いた小説を映画化することによって2匹目の「柳の下のどじょう」を狙っていたザヴァツキが、やっと彼は「ヒトラーのそっくりさん」ではなく、現代に蘇ったヒトラーその人だと確信したことを契機として訪れてくる。彼をお笑い芸人にして政治ネタでドイツ国民を笑わせ、高い視聴率をとって、自分も儲け有名になる。ザヴァツキのそんな目論みは見事に成功したが、ひょっとしてこのまま現代に蘇ったホンモノのヒトラー（の扇動）によって、ドイツが再び明確な人種差別政策をとっていくことになれば・・・。日本では、怒涛の勢いを見せていた橋下徹率いる日本維新の会（現おおさか維新の会）が2015年5月17日に実施した、大阪都構想をめぐる住民投票において僅差で敗れたことによって、その勢いはボヤリかけている。しかし、「新時代のヒーロー」として登場してきた橋下徹人気よりも、1930年代当時のヒトラー人気は何十倍もすごかったから、2014年のドイツに再びあのフィーバー（悪夢？）が蘇ってくれば・・・。

現代のドイツ社会、テレビ界に嫌気がさし、屈折した心を持っているものの、心の片隅に良識や良心を残していたザヴァツキがそこで、自ら発掘した金の卵を、自らの手で葬り去ろうとしたのもうなずける。しかして、今ザヴァツキの手元には、あの時「ヒトラーのそっくりさん」が小犬を打ち殺した拳銃が残されていたから、これを使えば現代に蘇ったヒトラー本人の抹殺は可能！クライマックスに向けてそんな緊迫の展開が続いていくが、このストーリー展開はホンモノ？それとも、ひょっとしてこれは劇中劇・・・？

それはともかく、6月22日に第24回参議院選挙の告示がされた今、日本国民として民主主義の要たる「投票権」を持つあなたは、7月10日に、その民主主義最大の権利をどう行使するの？それをしっかり考えながら、本作の「重み」を感じ、かつ論理的にしっかり分析したい。